

ヴェブレン的解釈で読む

The House of Mirth

上 田 み ど り

序

Edith Wharton (1862-1937) は、ヨーロッパ的教養を身につけた、貴族的な作家であることは知られている。しかし彼女はアメリカの同時代の新しい動きに無関心で、彼女の描く作品は、限られた世界についての風俗小説だとの否定的見方をする批評家がこれまで多かった。この拙論では、まず、当時のアメリカ社会の速い動きの中で顕著に表れた、上流有閑階級社会を描く社会的必然性を持ちながら、作者が精緻な観察力で描いた個の行動原理を探り、風俗小説に終わっていない、作品の持つ普遍性を明らかにしようとするものである。

十九世紀後半から二十世紀に向かって、アメリカ東部ニューヨークを中心に、人口は飛躍的に都市に集中し、それに伴い北部の経済活動が活発化し、富裕階級と称せられる人々が生まれ、特殊な社会を構成していった。

1988年に John Kenneath Galbraith が著した『経済学の歴史』によると、南北戦争（1861-65）以後の土地所有問題に関して、アメリカ社会は、1862年のホームステッド法⁽¹⁾の様に実にアメリカの公平な解決をしており、

- (1) 西部の入植者に公有地を払い下げを規定した法律。一家に一般的見積もりに従って、160エーカーという莫大な土地を与えた。これほど当事者と外部の観察者双方に普遍的な承認をもって見られた経済上の目論見はなかった。『経済学の歴史』（ダイヤモンド社、1988）、p. 224

土地所有から生まれたイギリス貴族の社会的階級の性格と、アメリカのそれとは、質が異なる。従って土地問題からの経済問題における関心は、アメリカでは少なかったようである。アメリカの経済学において、特に顕著な関心事は、三つあるとガルブレイスは言う。ひとつは、独占に対して決然たる措置をとったこと、次は、ハーバート・スペンサーの社会ダーウィニズムである。第三はソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Veblen) (1857-1929) による、アメリカの富豪をからかって著した『有閑階級の理論』(*The Theory of the Leisure Class*) (1899) である。⁽²⁾ ヴェブレンは未開人の種族を描写し、近代の富豪を未開人と同類視したことで有名である。その第一章の序は、“The institution of a leisure class is found in its best development at the higher stages of the barbarian culture...”（有閑階級という制度は、野蛮人の文化が比較的高度の段階に入った時に最も発達した形で見いだされる⁽³⁾）という書き出しで始まる、現在でもアメリカ経済の世界を、異なる角度からながめた本としても広く読まれている。特に、Wharton の1905年の作品、*The House of Mirth* は、このようなアメリカ経済社会の時代にあって、その変化のうねりに飲み込まれ、居場所を失った一女性主人公を通して、アメリカ型経済社会が、ヨーロッパ型経済から離脱し、独自の経済社会構築へと進んだ影の部分を著そうとした作品と解釈できる。このような経済事情の中、作者 Wharton が創った作中人物の価値観を浮き彫りにし、ヴェブレンの『有閑階級の理論』を照らし合わせ、作品を検証しようとするものである。

1. リリー・バートの価値観と消費行動との関係

舞台は大鉄道時代を象徴するニューヨークのグランドセントラル駅。避暑地であるロードアイランド州ニューポートからの帰り、9月主人公リ

(2) *ibid*, p. 230 アメリカでは古典派の正統な経済学派に対して、ガルブレイズがこのソースタイン・ヴェブレンと、ヘンリー・ジョージの存在を特に挙げている。

(3) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class* (Viking Press, 1967), p. 1

リー・バートが、遠い親戚の青年セルデンに偶然に出会う場面が、次の様に描写されている。

“...And I don't know what to do with myself. My maid came up this morning to do some shopping for me, and was to go on to Bellomont at one o'clock, and my aunt's house is closed, and I don't know a soul in town.” She glanced plaintively about the station. “It is hotter than Mrs. Van Osburgh's, after all. If you can spare the time, do take me somewhere for a breath of air”⁽⁴⁾

この彼女の発言の中のベロモントというのは、作者ウォートンが、親しくもあり、影響を受けたハドソン川近くのミルズマンションのことを示し⁽⁵⁾、ヴァンオズバラーは作者の友人のヴァンダビルトのコード名であることはあきらかである⁽⁶⁾。上記のリー・バートの発言から我々にわかるのは、彼女の生活が、この安寧と快適性を所有する有閑上流社会に帰属していることである。特にこの発言の中で、“I don't know”という文言が二度口にされ、その上、二時間の閑暇 (leisure) をどのように過ごすかの判断をセルデンに委ねているのが、特徴的である。このことから主人公の個性として、依存的性格 (dependency) が印象づけられる。この特徴は個人の意思が社会的な動きに大きく左右されやすいことを裏付けるものである。

しかし個性は内的要因 (nature) と外的要因 (environment) の相互作用 (interaction) によって形成されるものであるから、リー・バートの内的要因がどの様に外的要因にコミットしていくのかを次に見ていく。

(4) テキストは、Edith Wharton, *The House of Mirth*, (New York, London: W. W. Norton & Company, 1990) を使用した。本文引用はすべてこの版からであり、ページ数は引用に続けて、括弧内に入れて示す。p. 6

(5) Threasa Craig, *Edith Wharton*, (The Monacelli Press, 1996), p. 62

(6) *ibid*, p. 59

次の引用から理解できる様に、まず彼女の生まれは、富裕階級にありながら、常にその地位は安定しているわけではない。

A house in which no one ever dined at home unless there was “company”; a door-bell perpetually ringing; a hall-table showered with square envelopes which were opened in haste, and oblong envelopes which were allowed to gather dust in the depths of a bronze jar; a series of French and English maids giving warning amid a chaos of hurriedly-ransacked wardrobes and dress-closets; an equally changing dynasty of nurses and footmen; quarrels in the pantry, the kitchen and the drawing-room; precipitate trips to Europe, and returns with gorged trunks and days of interminable unpacking; semi-annual discussions as to where the summer should be spent, grey interludes of economy and brilliant reactions of expense—such was the setting of Lily Bart’s first memories. (HM p. 25)

招待状の角封筒からあるいはその消費にかかわる人、費用の有り様からリリーの少女時代の家庭の消費の全体像が映し出されている。「自分の妻に相応の形でその時代の常識が要求する程度の代理的閑暇を代行させるために、極めて勤勉に仕事にたずさわっている男をみるのは、あながち珍しいことではない」⁽⁷⁾とヴェブレンが言っているように、リリーの生活は父親の勤勉な労働によって支えられている。つまりリリーの父親は、典型的なアメリカの資本家であり、経営者であったと言える。アメリカの富裕階級にある経営者は同時に労働者でもある。ところが、父親の破産宣言によってこの体制がくずれることになる。リリーは19才である。母親は彼女の美を慰めとし、パート家の最後の至宝 (the last asset in their fortunes)

(7) *ibid.*, p. 81

(HM p. 29) としてリリーを自己所有の資産とみなす。しかし父親も母親も順次亡くなる。

従ってリリー・パートは残された身一つで自立する道を選ばねばならなくなる。彼女が富裕階級にあって、彼女自身「資本家」としてあてはめれば、彼女が持つ資本は、(1)貨幣資本、(2)生産資本、(3)商品資本のどれかを持っているはずである。まず貨幣資本については、母親が生存中も親戚中を放浪していることから、所有しているとは考えられない。つまり貨幣資本は残っていない。次の生産資本とは、自分の労働力のみで、生産設備や原材料を含まないことであるから、彼女が最低限困った時のみこれが残ることになる。最後の商品資本については、自分の所持する不動産ということになるのだが、彼女の場合これも父親の破産宣言以後所持しているはずもない。しかしアメリカの生活では、労働と消費の両者が揃って初めて自己実現が成立するため、主人公にとって労働はしなくとも収入を得られる社会ではない。従って、主人公が貨幣資本も商品資本も無くした時点で、アメリカでの自己実現の場を失ったため、それを再び得るには、自己の行動様式を変えるか、あるいは新しい収入源、つまり、結婚相手を見つけるという外的要因を保証する生活形態を選択するかのどちらかである。リリーは後者を優先する。なぜ、そのような行動様式をリリーがとるのは、つぎのヴェブレンの 'conspicuous consumption' (目にみえる・みせびらかしの消費) の一部に有閑階級の社会通念の基本概念が、それを裏付けているように思う。

So much so that there are few of the better class who are not possessed of an instinctive repugnance for the vulgar forms of labour....Vulgar surroundings, mean (that is to say, inexpensive) habitations, and vulgarly productive occupations are unhesitatingly condemned and avoided....From the days of the Greek philosophers to the present, a degree of leisure and of exemption

from contact with such industrial processes as serve the immediate thoughtful men as a prerequisite to a worthy of beautiful, or even a blameless, human life. In itself and in its consequences the life of leisure is beautiful and ennobling in all civilised men's eyes.⁽⁸⁾

上記の引用文に示される行動様式は、リリーが帰属する社会を表し、彼女のそれまで受容した文化的背景、環境つまり外的要因と彼女の資質、内的要因とが、融合し合っている。そしてそれは海を越えたイギリスで、「1840年代までに中流階級を主体に動いていたヴィクトリア時代の性と結婚の倫理が、上流階級まで浸透し、90年代には、ジェントリー層からリスベクタブルな幅広い人々に浸透していたとみられる。⁽⁹⁾」と同時に、アメリカでは「お上品な伝統」の時代にあり、経済的に逼迫した事態の解決を、ある一女性が結婚に求めたとしても不思議はない。

2. 自由と牢獄——結婚相手とのすれちがい

リリーの好みの結婚相手は、政治的野心を持ち、広い敷地を持つイギリス紳士か、アペニン山の城を持ち、ヴァチカン至国で代々執務室を持つイタリアのプリンスであることが述べられる。具体的に名前が挙がるのが、パーシーグライス (Percy Gryce) で、年収八十万ドルの有閑階級に属する人物である。次の引用文に見られるように、リリーはパーシーに出会い、彼を意識し始めてから、現実の不安定な生活から逃れることを夢見る。

Lily did not want to join the circle about the tea-table. They represented the future she had chosen, and she was content with it, but in no haste to anticipate its joys. The certainty the she

(8) P. J. Cain & A. G. Hopkins 『ジェントルマン資本主義の帝国 I』(名古屋大学出版会, 1997) p.p. 37-38

(9) 度会好一 『ヴィクトリア朝の性と結婚』(中央公論社, 1997) p.p. 225-227

could marry Percy Gryce when she pleased had lifted a heavy load from her mind, and her money troubles weere too recent for their removal not to leave a sense of relief which a less discerning intelligence might have taken for happiness. Her vulgar cares were at an end. (HM p.p. 40-41)

上記の描写にあるように、このお茶のテーブルにいる仲間つまり有閑階級の連中を否定したいのだが、それは彼女の属する階級であり、現在の不安定な生活から逃れるためには、この同じグループに帰属する必要性がある。つまり彼女の消費生活にみあう収入源を確保できるという安心感を得るためには、適切な行動をとらねばならない。しかしそのため精神的ないらだちが生じる。

なぜなら無収入に対する危惧を取り除くという当座の問題にとらわれているが、過去の浪費型の生活を変えようとはせず、それ故リリーの生活は、Veblen の指摘する extravagance そのものを体現しているからである。彼女の行動様式は今の自己の生活態度を持続するという傾向延長型と言える。それは環境の変化を察知していたとはいえ、自覚が不十分なためか、あるいは何をすればよいかわかっていないからである。もしもパーシー・グライスを手に入れようとするのであれば、リスク分散を考え、複数の手段を持つという、戦略的行動をとることが、効果的と考えられるが、彼女にはできない。なぜならリリーの気持ちは、パーシー・グライスに焦点が合わされているのではなく、ローレンス・セルデンに向けられているからである。

彼女がセルデンに会って感じる気持ちは、1. アメリカ的な自由、2. 恐怖心で満たされた暗闇の牢獄である。1. はアメリカの上流階級の枠を越えた自由な恋愛や結婚を象徴しているが、セルデンは彼女に経済的側面を支えるには足りないのであるから、結婚という収入源の保証はなく、もし彼女がセルデンを選ぶのであれば、富裕階級には留められないことを示唆

している。また2. に示されるのは彼女が将来に抱く不安、自分の力では及ばない何かに、はめこまれるかもしれない社会の落とし穴を暗示している。この不安は登場人物それぞれが味わっている感情であることを、トム・ルッツ (Tom Lutz) は、指摘する。例えば、ガーティ・ファリッシュ (Gerty Farrish) は結婚がセルダンの不安を治癒すると提案しているし、ジョージ・ドーセット (George Dorset) は妻パーサの不倫問題で常に不安状態の気難しい性格をしている。またリリーがわずかな手持ちの資金で、依頼したガス・トレナー (Gus Trenor) の投機は、リリーに性的な関係を求め彼女を不安にしているし、サイモン・ローズデール (Simon Rosedale) はリリーの無分別を知っていて、彼女を明らかに不安にさせているといった様に、⁽¹⁰⁾ リリーを取り巻く人間関係は、不安を互いに生む社会を構成している。

こういった精神的混沌の渦中、リリーは、求婚者グライス氏の散歩の誘いを断っている。このことが二人のすれ違いを生み出す原点になる。彼女は戦略的行動をとるにはあまりにも無垢なのである。リリーのいらだった神経を慰めるのは、彼女の経済的生活能力の主なしるしとなる、彼女の美しさが、男性から褒めたたえられることなのである。このリリーの価値観は、彼女に何の保証も与えない。ところが彼女は最高入札者に自分を売らなかった。つまり富裕貴族のパーシー・グライスを拒否した。その上、新興成金のローズデールを、そして既婚のトレナーをそれぞれ拒否している。⁽¹²⁾ このことは、結婚による自己実現が、作者ウォートンにとっても最後の精神の拠り所にはなりえなかったという彼女の実人生を反映していると思われる。ウォートンの作品では、結婚を「監獄」としてとらえていることは多く、女性男性を問わず、行き場のない人間の閉塞感を表している。⁽¹³⁾

(10) Tom Lutz, p. 234, *American Nervousness 1903 An Anecdotal History*, (Cornell University Press, 1991), p. 234

(11) *ibid*, p. 234

(12) *ibid*, p. 234

(13) Wharton の他の作品 *Ethan Frome* (1911), や *The Age of Innocence* (1920) においても同じテーマが流れている。

3. 投機 の 失 敗

アメリカの1890年代は、すでにフロンティアの「消滅」が指摘され、さらに1870年代から周期的かつ長期にわたる経済恐慌の中で、1893年恐慌に見舞われる⁽¹⁴⁾。このことを反映していると思われる次の引用は、当時のニューヨークの経済事情を物語っている。

It had been a bad autumn in Wall Street, where prices fell in accordance with that peculiar law which proves railway stocks and bales of cotton to be more sensitive to the allotment of executive power than many estimable citizens trained to all the advantages of self-governments. Even fortunes supposed to be independent of the market either betrayed a secret dependence on it, or suffered from a sympathetic affection: fashion sulked in its country-houses, or came to town incognito, general entertainments were discountenanced, and informality and short dinners became the fashion. (HM p. 95)

上記の文によると、ニューヨークの有閑階級の中にもこの時資産を減じた者が大勢いたことは窺われる。例えば、「他人の日常生活にたいするこういう非同情的な観察者に金銭的能力を印象づける唯一の実際的手段は、支払い能力をたえまなく誇示することである⁽¹⁵⁾」と、ヴェブレンが有閑階級の生き方に看破する ‘conspicuous consumption’ 「見せびらかしの消費」が作品の中の至るところに展開されている反面、そのみせびらかしの消費が、経済競争の勝敗によって左右され、その陰りが印象付けられている。有閑階級がどのくらい豊かであるかの誇示は、人々の集まる教会、劇場、

(14) 『経済学大辞典Ⅲ』（東洋経済新報社、1980）、p. 112

(15) Thorstein Veblen *The Theory of the Leisure Class* p. 87

ホテル、商店等でおこなわれるのは当然であったが、投機の失敗で、収入が落ち込むと共に、彼らはこういった場に出なくなり、消費を控える。つまり彼らの消費の様式が浪費を控えたものに变化していることを物語っている。

主人公リリーが、このような経済動向の影響をもろに受けていることは確かである。次の引用には彼女の資産運用の失敗が、彼女の運命を見えない網に取り込んでいく過程を示している。

Lily, who considered herself above narrow prejudices, had not imagined that the fact of letting Gus Trenor make a little money for her would ever disturb her self-complacency....As she exhausted the amusement of spending the money these complications became more pressing, and Lily, whose mind could be severely logical in tracing the causes of her ill-luck to others, justified herself by the thought that she owed all her troubles to the enemy of Bertha Dorset. (HM p. 101)

ここで、リリーの偏見のなさが、社会的無知と無垢をないまぜにしたアメリカ娘の特徴を強調させている。そしてそのことで、投機を実際に行ってもらった人物の選択に誤りが生じていたことを自覚する。それはリリー本人の選択の幅がなく、適格な人を見つけ出せなかった自己の判断ミスであったにもかかわらず、それを認めようとはせず、バーサ・ドーセットという危険な女性のせいにする事で自分を正当化し、自己防衛をしているのである。

つまり収入源を獲得する方法として結婚以外に、リリーが考えたことは、小額の資本とは言いがたい額を新興成金ガス・トレナーに預け、株の投機に当てることであったが、彼女の預けた額がいくらであろうと関係なく、ガス・トレナーは、シャーロット・パーキンズ・ギルマンが、「女性の経

済的地位は性的関係にかかわる¹⁶⁾」と言っているように、リリーに、富の分配と共にそのような関係を望んでいるのである。

従って、彼女はこのことから手をひくことにし、投機に対する期待は、生産のための投資 (investment) であったけれども、消費のためのリスクの多い投機 (gambling) に変わる。なぜなら、ガス・トレナーに預けたお金も返金不可能となり、ブリッジに代表される一連のトランプギャンブルにも失敗し、借金までしてしまうのであるから、投機によって、可処分所得を継続して保持することも、増やすこともできない。こうした苦境の状況にあって、リリーはセレステという名の高級衣料品店で、彼女が注文した高価なドレスや、既婚者トレナーとの関係のことを、後見人で後に財産相続権を獲得するのに一番近い存在にある叔母（父親の姉）に、友人によって告げ口をされる。このことで叔母の気持ちは動揺し、姪であるリリーに不信感がつのる。叔母からの多大な援助で成り立っているリリーの生活は不安定にならざるをえなくなる。

第一部の最終章、十五章でリリーは、その叔母に借金返済の窮状を訴えるが、すべてを語らない。そのことが却って叔母への理解を求められなくしてしまう。この決定的結末は第二部の四章で明らかにされる叔母の急な死の後、発表された財産分与の時に明白になる。リリーに譲られるはずの財産は予想をはるかに越えて少額である。「彼女には叔母、ミセス・ペニストンの遺産のうち千ドルしか残らない」し、しかも「遺言の解釈に関する問題がいくつか起こり、その解釈のために法律に定められた十二カ月が過ぎなければ、遺産は支払われないだろう」というリリーにとって究極の厳しい結論が出る。(HM p. 288) その上、グレイス・ステプニーから叔母の死の原因が、リリーにあると聴かされるが、リリーは誤解の上に成り立ったその中傷に対して、何ら事実を説明し、申し開きをする機会も与えられず、ミセス・ペニストンの家から追放されたも同然で出てゆく。このことで、リリーは生活する家を失い、生活水準は目に見えて後退することに

(16) Edith Wharton, *The House of Mirth* p. 288

なる。このリリーの経済状態の展開と彼女の姿勢は、ヴェブレンの金銭的生活水準の章の解釈にあてはめることができる

It is much more difficult to recede from a scale of expenditure once adopted than it is to extend the accustomed scale in response to an accession of wealth. Many items of customary expenditure prove on analysis to be almost purely wasteful, and they are therefore honorific only, but after they have once been incorporated into the scale of decent consumption, and so have become an integral part of one's scheme of life, it is quite as hard to give up these as it is to give up many items that conduce directly to one's physical comfort, or even that may be necessary to life and health. That is to say, the conspicuously wasteful honorific expenditure that confers spiritual well-being may become more indispensable than much of that expenditure which ministers to the "lower" wants of physical well-being or sustenance only. It is notoriously just as difficult to recede from a "high" standard of living as it is to lower a standard which is already relatively low; although in the former case the difficulty is a moral one, while in the latter it may involve a material deduction from the physical comforts of life.⁽¹⁷⁾

このヴェブレンの解釈によれば、リリーの生活水準の維持は、彼女の体的消費の規模に組み入れられ、生活様式の不可欠な部分となっているから、難しいのであり、その難しさは道徳的なものとも言える。つまり階級の差異化において、物質的なものは比較的獲得しやすいが、ライフスタイルやマナーといった生活習慣実践中に獲得されるものは、時間を必要とし、

(17) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class*, p.p. 102-103

ある程度のロールモデルがあるはずである。そのためリリーは突然の人生の下降気流に飲み込まれ、その実態を把握し、自分のものとして学習する必要にせまられるのである。

4. 労働者階級の台頭と影

ミセス・ペニストンの家のドアが閉まった時、リリーの昔の良き生活は終わりを告げた。リリーがそのことを考えながら歩いているところで、ミセス・フィッシャーに出会う。そこで新興成金のサム・ゴーマーのパーティに誘われ出席することになる。しかしその環境はリリーのいつもさけてきた、本物のコピーであり、‘カリカチュア’だった。古い伝統、しきたりを継続維持する富裕階級と自由な空気をもたらす新興勢力との、外見や態度の差を次の引用は微妙に描写している。

The people about her were doing the same things as the Trenors, the Van Osburghs and the Dorsets: the difference lay in a hundred shades of aspect and manner, from the pattern of the men's waistcoats to the inflexion of the women's voices. Everything was pitched in a higher key, and there was more of each thing: more noise, more colour, more champagne, more familiarity—but also greater good-nature, less rivalry, and a fresher capacity for enjoyment. (HM p.182)

リリーはこの新興勢力の人達の集まりの中で、声高に話す調子に昔の彼女が帰属していた人々とのちがいをと感じ取る反面、ここに集まる新興勢力の人々の新鮮な積極性を見いだすのである。古い浅薄な階級内のしきたりに苛立ちを感じ、この新しい何者をも受け入れる気安さを、リリーは快く思うのではあるが、物質的な困難が取り除かれた生活へ、そっと戻りたいという淡い期待を無意識のうちに感じているのである。(HM p.184)

シーズンが終わり、冬投宿するはずの小さなホテルの一室を借りることにしたリリーは、現在の中途半端な立場、落ちぶれた身分を隠すためのあらゆる努力をする。そして一度拒否していたローズデールとの結婚が、この窮状を解決する唯一名誉ある方法だと判断してもう一度ローズデールに持ちかけるのであるが、今度はローズデールの方からリリーを拒否する。ローズデールが今望んでいる商品は「社交界に入る」ということでしかない。そのための数年かかった彼の努力が、リリーといふことで無駄になることを、彼はリリーに告げる。その時のローズデールの目つきをリリーは、‘small stocktaking eyes’ (在庫調べ・棚卸しをするような目) と捉え、自分を ‘superfine human merchandise’ (極上の人間商品) と表現している。ここでリリーが、現実世界で差し出すことのできる最後の切り札として、市場に売り出す商品に自分を見立てていることに我々は気づく。

リリーの有閑階級との取引材料は、バーサ・ドーセットの不倫を証明する手紙であった。上手く使えば、リリーの潔白を明らかにするはずであったのに、彼女はその行動に出ないことで誤解を生み、取引はすべて失敗する。

万策つきてしまったリリーは「挨拶状を書く」とか、「訪問者名簿の作成」とか「社交事務の秘書」(HM p. 208) という仕事を探していることを、親身に相談にのってくれるガーティに打ち明ける。リリーは自尊心を傷つけられるのだが、生き延びる方法として「労働」を実戦しなければならぬ。実際、ミセス・ハッチの秘書、マダム・レジーナの婦人帽の作業場の手仕事もやってみるの다가長続きはしない。すでにヴェブレンの理論で確認したように、生活水準を切り下げること、精神的道徳的な苦痛が伴うからである。

ある日再び会えないかもしれないとしてセルダンを訪問した後、リリーは昔、慈善事業で貧困を救った娘に出会う。ネッティ・ストラザー (Nettie Struther) は今や希望と精力で溢れていた。彼女は貿易会社でタイピストとして働いていた。ネッティは労働することで富を得ていた。上流階級

まではのぼらないとしても、彼らを真似る段階には到達していた。

ここにアメリカ資本主義の特徴である富の配分と、その配分の公平性がある。この典型がT型フォード式の成功である。つまり車を作るから、仕事生まれ、労働者は働き、自分たちが作ったT型フォードを自分たちの掴んだ賃金で購入する。こうしたひとつのサイクルができあがる。アメリカでは、誰でも、勤勉に働けば欲しいものは手に入るという希望が生まれ、富裕階級の消費に近づく。ものは大量に生産され、貴族的消費の大衆化が起こる。

このサイクルからはずれてしまったのが、リリーのような時代に取り残された女性であった。このようにリリーのように富裕階級にいるものが、不適応であれば、階級に転倒が起こる。このことはヴェブレンが次のように指摘する。

The constituency of the leisure class is kept up by a continual selective process, whereby the individuals and lines of descent that are eminently fitted for an aggressive pecuniary competition are withdrawn from the lower classes. In order to reach the upper levels the aspirant must have, not only a fair average complement of the pecuniary aptitudes, but he must have these gifts in such an eminent degree as to overcome very material difficulties that stand in the way of his ascent. Barring accidents, the *nouveaux arrivés* are a picked body.⁽¹⁸⁾

有閑階級にもここでダーウィニズム的発想が、暗示されるが、自然淘汰の原則に対して、ヴェブレンは、自らの環境を意思的に変えようとする、能動的な知的存在としての人間に着目しているのである。⁽¹⁹⁾それに反してリ

(18) *ibid.*, Thorstein Veblen, p. 235

(19) 『経済学大辞典Ⅲ』（東洋経済新報社、1980）p. 533

リーの場合、労働とは無縁であり、富裕階級にいて自己のアイデンティティーを、適格な状況判断と意思の下に再構築できなかったため、自己矛盾を引き起こし、その解決策として自殺を選ばざるをえなかったのである。ネッティとリリーの運命の逆転劇に、アメリカ資本主義社会の冷酷な自然淘汰の仕組みが、暗示されている。

結 論

富の所有とその使用における主役交替の背景には、資本主義社会における市場経済が、アメリカで相当に発達していく経緯があり、アメリカの経済の新しい局面に入り、Veblen はそのみなおしを理論的に説明し、ウォートンはこの *The House of Mirth* において実人生を重ね合わせ、その社会現象の影の部分を的確に把握し、それを芸術的側面から批判し描写している。そして *The House of Mirth* と、時をおなじくして Max Waver の *The Protest and Ethic & the Spirit of Capitalism* (1904-1905) という資本主義の精神的裏付けを歴史的に分析した本が、出ているのも exciting かつ象徴的現象であると思う。